

高長虹の創作と思想¹（上）

—初期から狂飊社前期にかけて—

内 藤 忠 和

1. はじめに

1.1 高長虹（1898年—1954年）について

1898年2月12日、山西省孟県清城鎮西溝村の農耕と学問を生業とする裕福な家庭に生まれる、本名高仰愈。孟県高等小学校を経て1914年、山西省立第一中学に入学する。優秀な学生であったが袁世凱の皇帝即位運動に反対して迫害を受け、中学を中退して故郷に戻った。

学業を断念せざるを得なくなった高は文学の道を志す。1921年、『晨报』に発表した翻訳「訳恵特曼小詩五首」を皮切りに、翌年3月、『小説月報』に詩歌「紅葉」を発表し、創作生活を開始する。1924年夏、山西省の文学青年を中心に“平民芸術団”（のち“狂飊社”）を結成、同年9月1日、太原において『狂飊』月刊を創刊し、“狂飊運動”を開始した。

24年9月末には単身北京に向かい、11月9日、『国風日報』副刊として北京『狂飊』週刊を創刊する。12月10日、初めて魯迅を訪問し、以後交流が始まった。1925年4月、魯迅の求めに応じて『莽原』週刊の創刊メンバーに加わり、『莽原』同人の主力として活躍した。11月27日、『莽原』週刊が半月刊に改められ、編集及び発行体制が刷新された際、引き続き魯迅から編集を担当するよう求められたが辞退する。

1926年4月16日、狂飊社同人鄭效洵を伴って上海に赴き、10月10日上海『狂飊』週刊を創刊して新天地での“狂飊運動”を展開した。同じく10月10日、魯迅・韋素園に手紙を書き、10月17日『狂飊』週刊第2期に発表した。これにより莽原社内部の対立が公のものとなる。高長虹は魯迅の弟周作人に対しても攻撃を加え、魯迅は11月20日「所謂“思想界先駆者”魯迅啓事」を発表して高長虹に反撃し、魯迅との論戦が勃発した。

1928年、向培良・柯仲平・高沐鴻ら狂飊社同人に上海に集まるよう呼びかけた。また同年10月13日、個人誌『長虹週刊』を創刊し、11月初めには狂飊社演劇部を上海市において成立させるなど、“狂飊運動”の新たな展開を志した。

しかし再び運動を盛り立てることはできず、1930年2月、高長虹は単身日本に渡り、“狂飜社”は正式に活動を停止し、同人はばらばらになった。以後38年に帰国するまでドイツ・フランス・オランダ・スイス・イギリスを転々とし、極貧の中、学び執筆を続ける日々を送った。

1937年7月、日中戦争勃発を契機に帰国を決意し、1938年6月、香港に到着した。翌月、潘漢年の紹介で武漢に行き、“中華全国文芸抗敵協会（文協）”に加入した。10月中旬、文協に従って重慶に移転する。武漢・重慶滞在中には「一点回憶—關於魯迅和我」（1940年8月25日・9月1日、『国民公報・星期増刊』）ほか数多くの文章を発表した。

1941年4月、重慶を離れ、単身徒歩で延安に向かう。11月延安に到着し、“文抗”（中華全国文芸抗敵協会延安支部）駐在作家となる。1942年5月、延安文芸座談会が開催されたが、高長虹は延安の文芸関係者の中でただ一人参加しなかった。

1945年8月中旬、毛沢東自ら高長虹を訪ねて会談し、抗日戦争勝利後の考えを求めたとき、高はアメリカに行つて経済を研究し、帰国後に新中国建設に従事したいと答えた。毛沢東はそれを耳にして腹を立て、喧嘩別れになったという。

1946年春、延安を出て東北に向かう。10月東北分局所在地のハルピンに到着し、のち東北分局が瀋陽に移転するのに伴い高も瀋陽に移り、東北局宣伝部招待所の東北旅社に住んだ。人との交流を避け、外国語で外国の詩歌を朗誦する生活を送っていたため、周囲の人々から精神を患っていると誤解される。

1954年春、突発性脳溢血によりこの世を去った。²

作品集に『精神与愛的女神』（1925年）、『閃光』（1925年）、『心的探検』（1926年）、『光与熱』（1927年）、『給—』（1927年）、『獻給自然的女兒』（1928年）、『時代的先駆』（1928年）、『春天的人们』（1928年）、『曙』（1928年）、『実生活』（1928年）、『走到出版界』（1928年）、『青白』（1928年）、『遊離』（1928年）、『荒島到莽原』（1928年）、『神仙世界』（1929年）、『草書紀念』（1929年）、『政治的の新生』（1938年）、『延安集』（1946年）がある。

高長虹は1920年代の中国文壇において、“狂飜社”を主宰して太原・北京における“狂飜運動”を展開すると同時に、魯迅とともに『莽原』を拠点として五四運動後の思想革命を推進した。魯迅と決別後は上海において“狂飜運動”の再興を図るが果たせず、数年の海外放浪の後、抗日戦争の渦中にある祖国に戻って

抗日救国のために筆を揮った。しかし重慶・延安いずれにも居場所を見いだせず、建国後東北の地で孤独にその生涯を終えた。20世紀中国における進歩的文化人の在りようの一つを示す生涯であったと言える。

1.2 先行研究

高長虹をめぐる研究は以下の2種類に大別することができる；

① 狂飊社研究における高長虹

狂飊社をめぐる研究については、既に拙稿「高沫鴻の詩作について」(2020、以後 内藤2020)³において一度まとめているため、ここではその概略と課題について指摘するに留めたい。

狂飊社は1920年代に活動した文学流派であるが、魯迅との軋轢、活動期間の短さによる現存資料の欠落、高長虹の共産党との関係性、といった理由から1920年代から70年代にかけて狂飊社に関する研究は殆ど存在しない⁴。こうした状況に変化が訪れるのは1980年以後のことであり、以後、a. 当時の関係者による回想、b. 高長虹と魯迅の論争、c. 狂飊社という文学流派の紹介、d. 狂飊社自体の思想的、文芸的価値の検討、といった成果が登場するようになった。近年にあつては『魯迅与高長虹』(董大中 河北人民出版社 1999年)といった魯迅と高長虹の衝突に対して詳細な分析を加えた労作や、『一群被驚醒の人—狂飊社研究』(廖久明 2011年 武漢出版社 以後 廖2011)といった狂飊社の歴史的経緯から思想的背景及び文学的価値に至るまで幅広く視野に入れた成果も出始めている。

これらの研究において、その焦点はやはり主宰である高長虹にあてられており、高沫鴻・柯仲平・向培良・尚鉞・高歌・朋其といった“狂飊社”同人に関する研究はまだ十分とはいえない、という課題も存在している。

② 高長虹個人に関する研究

“狂飊社”研究同様、高長虹個人に関する研究も、1980年代に入ってから本格化している。1989年に出版された『高長虹文集』(孟鼎政協『高長虹文集』編集委員会 社会科学出版)を皮切りに、2011年には『高長虹全集』(『高長虹全集』編集委員会 中央編訳出版社 以下『全集』)及び『高長虹年譜』(廖久明 人民出版社 以下『年譜』)が発行され、現在では高の作品と生涯の全貌に触れることが可能になっている。

個別の研究としては；i. 高長虹の生前の事績を回想するもの：「談《狂飊社》成員高長虹」(張謙『晋陽學刊』1982年6月)、「高長虹片断」(青苗『新文

学史料』1984年5月）他、ii. 高長虹の生涯と創作活動を概観したもの：「高長虹創作走向略述」（言行『歴史的沈重』百花文芸出版社 1996年所収）他、iii. 高長虹の創作及び思想に焦点をあてたもの：「高長虹詩文散論」（屈毓秀『晋陽学刊』1986年6月）、「高長虹詩論」（郝雨『中国現代文学叢刊』2000年4号）、「高長虹二部詩集解説」（石興澤『塩城師範学院学報』2000年3期）、「精神創傷的置換与昇華—論高長虹詩歌創作的主题」（張清祥『南陽師範学院学報（社会科学）』2003年2卷1期）、「高長虹“狂飊思想”的歴史的淵源」（薛曉霞『知識窓』2011年2号）、「性的煩悶”对高長虹創作的影響」（廖久明『現代中国文化和科学』2011年1期）他、といった三種に分類することができる。

このように高長虹の生涯と創作・思想について論じた研究は近年増加傾向にあり、一定の成果を収めている。しかし高の生涯を通じた創作及びその思想を視野に入れた研究は現状ごくわずかと言ってよい。

1. 3 本稿の位置づけと目的

ここで本稿の目的について述べておきたい。上述のように、高長虹は“狂飊社”主宰として1920年代の思想革命の一翼を担い、抗日戦争期には重慶・延安と渡り歩いて独自の文芸活動を継続するなど中国近代文学において一定の影響力を発揮した存在である。しかし彼の創作と思想の全貌を対象とした研究は現状まだ少なく十分とはいえない。

論者は現在、山西省出身作家を主体とする二つの文学流派：“狂飊社”と“山葉蛋派”の比較というテーマの研究⁵を進めている。1920年代の思想革命を担った“狂飊社”の活動が、1940年代以降の人民共和国期文学を構成した“山葉蛋派”にどのように繋がっているのか、高長虹の創作と思想の全体像を描出しようとする本稿の試みは、上記テーマの一部を構成するものとなる。

2. 初期から太原時代

2. 1 翻訳詩と初期作品

高長虹は山西省孟県の学問と農耕を家業とする家庭に生まれ育ち、家塾から孟県高等小学校を経て山西省立第一中学に進学した。高等小学校在学中に辮髪を切り落とし、父親の意向であった法律学校進学を拒絶して大学進学を希望するなど反抗と独立の気質を併せ持つ少年であった。

1915年秋、袁世凱は帝位に即くことを目論み、山西省の軍閥閻錫山は省の政界・教育界を挙げてその即位を支持する運動を進めていたが、高長虹はこの運動に参加せず痛烈に批判した。1916年初め、高は即位運動への抵抗が原因で迫

害を受けて故郷に戻り、学業を断念する。後北京に遊学するが、費用に窮したため山西に戻り、自宅で独学による執筆活動を開始した。

1921年5月20日、高長虹は「訳恵特曼小詩五首」を『晨报』に、また1922年5月、「雑訳恵特曼詩」を『婦女雑誌』8巻5号に発表した、これはアメリカの詩人ホイットマン（1819-1892）の『Leaves of Grass（草の葉）』からの抄訳であり、デモクラシー・新世界へのあこがれ・人々との連帯・深遠なるもの、といったテーマを歌った短詩が選ばれている。またイギリスの詩人シェリー（1792-1822）の女性への恋慕・夢・自然などをテーマとした詩歌の翻訳「音楽」、「印度夜歌」、「悲歌」を『婦女雑誌』8巻2号（1922年2月1日）及び8巻3号（1922年3月1日）に発表している。

【初めての創作】

海外詩の翻訳によって文壇デビューを果たした高は、1922年5月、最初の創作となる「紅葉」を『小説月報』第13巻5期に発表する。

「紅葉」

山路上一片红叶
 吞着声儿伏着那里哭泣。
 她本是她母亲的爰子，
 怎当那一阵无情的风儿
 吹在这天涯海国。
 吹得下来，
 吹不上去，
 她只得伏在那里任人践踏；
 狗过来添一嘴；
 驴过来尿一泼（泡）；
 人过来踩一脚。
 遥想她的小兄弟们，
 围着她母亲的脖子还正在笑乐，
 她不由得吞着声儿哭泣。
 血泪儿流遍了全身，
 越添了十分的醉红的颜色。

「紅葉」

山道に一面の紅葉
 声を呑み込み突つ伏して泣いている。
 彼女はもと母親の愛娘、
 だがどうしようもなく一陣の無情の風が
 この天地の果てまで吹き飛ばした。
 吹き下りることはあっても、
 吹き上がることは無い、
 彼女は突つ伏して人に踏みにじられるがま
 ま；
 狗がやってきてひと舐め；
 ロバがやってきて小便をまき散らし；
 人がやってきて踏みつける。
 遥か思うは彼女の兄弟たち、
 母親の首を囲んで笑い戯れる、
 彼女は思わず声を呑み込んで泣く。
 血の涙が全身に流れ、
 さらに酔ったような紅色を添えた。

我从山路上走过，
看见这一片可怜的红叶，
我拾起来插在胸前，
像朵玫瑰花一般的爱惜。

私は山道を通り過ぎ、
この一面の可憐な紅葉を目にした、
私はそれを拾って胸元に挿し、
マイカイの花のように大事にする。⁶

本作はまず、「母」たる樹から離れ路上に落ちた紅葉が踏みしだかれ汚され、嘆き悲しみのあまりその姿をさらに紅色に染める様を描いており、「自然」に対する作者のまなざしを感じ取ることができる。また同時に樹から落ち蹂躪された紅葉を「私」が拾い上げ胸元に挿した行為は、紅葉を家庭から距離を置こうとする高自身になぞらえたと解釈できる。

同じく『小説月報』13巻5期には編集沈雁冰に宛てた書信「致沈雁冰」が掲載されており、自身の自然主義に対する考え：「自然主義の根本的な意義は人生の真実の姿を求めること」であり「科学的精神に基づいて、奮闘の態度を抱き、将来の機構を思い描いて将来の道のりに到達する」⁷ものである、と主張する。この書信には「長虹 山西盂県清城鎮 一九二二, 三, 八」と署名があり、上記2篇は故郷盂県清城鎮で執筆されたものと推測できる。

【太原へ】

この後、22年春或いは夏に高長虹は父親と仲違いして故郷を離れ、省都太原に出て文廟博物館の書記員となり、以後彼は太原を拠点に執筆活動を継続していくことになる。また、文廟博物館では石鼎臣と同僚となり、その娘石評梅との交流が始まるが、この交流は後に恋愛詩集『給—』につながっていく。

太原に活動の場を移した高長虹は、『晨报副鐫』⁸「家庭之下」欄を舞台に「永久的青年」（1923年9月10日⁹）、「禱歌」（1923年9月12日）、「懊惱」（1923年9月15日）、「檻中的狼」（1923年10月15日）といった詩歌を発表する。

「永久的青年」はもともと『小説月報』第13巻（1922年）10期に発表されたものであり、真理を青年に、先入観を老人に喩え、両者の断絶を歌う：「真理是永久的青年，／真理永久是新鮮的，／但在老人看来，／那是一种可惡的瘋癲。（真理是永久青年で、／真理は永久に新鮮だ、／だが老人からすれば、／それは憎むべき精神異常だ。）」¹⁰。

「禱歌」は、単調な生活に倦み、夢の中に慰めを求める「私」には悪夢こそが我が救世主であると主張する：「夢魔哟，我的惟一的救主哟！／只有你那

只仁慈的手，／才能引着我解脱了这人生的单调。(悪夢よ、私の唯一の救世主よ！／君の仁愛の手だけが、／私をこの人生の単調さから抜け出させてくれる。)」¹¹。

「懊惱」は当時高を悩ませていた“家庭の悲劇”を歌ったものである：「神秘的红线，／将那不可抗拒的命运，／系在我的颈上，／少年时代圆满的好梦惊醒了，／我那时才感到了人生的缺陷。(神秘的な赤い糸、／あの抗えない運命を、／私の首元に掛け、／少年時代の円満な夢から醒めた、／私はその時人生の欠陥を感じた。)」、「抗えない運命」を強いる封建的家庭制度の「欠陥」に気づいていたにもかかわらず、「但是-唉!不幸の小靈魂呵!／我所手造的罪孽，／为什么又驾在一个无辜者的身上?／我只有深深的忏悔，／站在我孩子的面前。(だが—ああ!不幸な魂よ!／私を作り出した罪悪が、／どうしてまた罪なき人のの上に行くのか?／私はただ深い懺悔を以て、／我が子の目の前に立つ。)」¹²「我が子」を生み出してしまった自身の「罪悪」を懺悔し、運命や家庭の束縛・封建社会の害悪を呪っている。

実際高長虹は1914年に祖父が決めた婚約者王巧弟と結婚し、1922年には長男高曙が生まれている。二弟高歌の結婚を“悲劇の第一幕”、自身の結婚を“悲劇の第二幕”¹³と呼び、封建的婚姻を忌み嫌いつつも従ってしまう自身の矛盾に苦しむ心理が本作の背景には存在している。

「檻中の狼」はまず自由を求めて叫びを上げる檻の中の狼を描く；「这不断的声音，／越发搅乱了我睡不宁贴的心神，／夜静时，／苍凉而悲壮，／檻中之狼，／为不自由而哀鸣。(この絶えざる声は、／ますます私の安らかに眠れない心をかき乱す、／夜の静まったとき、／荒涼として悲壮、／檻の中のオオカミは、／不自由さのせいで哀しみ鳴く。)」¹⁴そして「私」は、この檻の中の狼は「檻中之狼，／是我的生命的象征。(檻の中のオオカミは、／我が生命の象徴。)」自身の生命の象徴であると、自身と檻に囚われた狼を同一視する。この魂の自由を束縛する「檻」は、掲載欄の名称「家庭之下」からも家庭を指していることは明らかであり、家庭という個人の自由や運命を拘束する制度に対して「絶えざる声」を上げる高自身を投影させている。

このように初期作品の多くは、“旧家庭への抵抗”が主題となっており、これは従来屈1986・言行1996¹⁵も指摘してきたことである。しかし先行する翻訳詩との間には、自然・夢・真理・自由といった共通するテーマが存在しており、封建的家族制度という「檻」に囚われ藻掻き苦しむつつも、西洋の近代文学に

触れて新たな世界に目覚めた青年の率直な心情も読み取ることができる。

2.2 太原『狂飆』月刊

太原において高長虹は、同僚石鼎臣の娘である石評梅や、また晋華書社¹⁶の創設者のひとり張稼夫など、進歩的知識人との交遊関係を広げていく。そして1923年夏、高長虹は太原第一師範を卒業した二弟高歌を通じて後輩の高沐鴻と知り合い、この出会いが後に「狂飆社」の結成につながることになる。

1924年1月10日、高長虹は『小説月報』第15巻第1期に散文詩「三個死的客人」を発表した。「私」は夢の中で三人の死者の来訪を受けるが、骨の姿をした死者からは羞恥心を刺激されて彼を追い出し、奇妙に聳え立つ皮膚の姿をした死者に寂寞を感じるも彼を拒絶し、最後に血にまみれた剣のような姿の死者を荆棘に満ちた自らの家に招き入れる、という幻想的・寓話的な作品である；「**最后，第三个死的客人来了。在他那映耀夺目如霜剑之光的身体上，涂饰着从各样不同的血管里流出的鲜血，我用了无量的欢迎，请进我充满了荆棘的生命之屋里。**（最後に、三人目の死んだ客人がやってきた。彼の目も眩むばかりに輝く鋭利な剣のような体の上には、様々な血管から流れ出た鮮血が塗られており、私はこの上ない歓迎を以て、私の荆に満ちた生命の家に迎え入れたのだった。）」¹⁷。

血まみれの剣の姿をした死者を「荆に満ちた」自身の家に迎え入れる、という行為は、ともに血にまみれて戦う荆の道を歩む仲間を受け入れたことの寓意であると考えられる。後に北京『狂飆』週刊第2期に発表した「狂飆之歌（序言）」（1924年11月16日）及び第3期に発表した「狂飆之歌（青年）」（1924年11月23日）にも血と剣のイメージは多々登場していることから、狂飆運動の開始を予感させる作となっている。

1924年夏、高長虹を中心とする高歌、高沐鴻、段復生、籍雨農、張盤石といった文学青年は太原において“平民芸術団”を結成し、9月1日に太原『狂飆』月刊を創刊した。本誌は紅色の油印本であり、毎号8ページ、3期まで発行され、編集者は“平民芸術団”、発行所は太原橋頭街少年書社であったという¹⁸。

高長虹はこの太原『狂飆』月刊に第1作品集『精神与美的女神』所収の作品の多くを発表している。

まず1924年9月の第1期に発表された「美的頌歌」・「恒山心影」に注目してみよう：

「美的頌歌」は五言四句、16連構造の定型詩であり、美女、恐らくは石評梅への恋慕の情を綴ったものである：「1 名城多美女，／彼美生于此，／在此名城中，／彼为最美者。（名城に美女多く、／彼女の美はここに生まれる、／この名城に在りて／彼女がもっとも美しい。）」「3 不得彼美盼，／长江昏且浊；／不得彼美笑，／晴天暗如墨。（彼女の美しき眼差しを手に入れなければ、／長江は暗くまた濁るだろう；／彼女の美しき微笑みを得なければ、／晴天も暗きこと墨のよう。）」前半において言葉を尽くして「彼女」の美しさを称賛した「私」は、もと世俗から距離を置く「超人」であったが、彼女と出会ってその美しさにのめりこむ：「13 我本一超人，／遨游世界顶，／自我得彼美，／赤子得慈母。（私はもと超人であり、／世界の頂点を漫遊していた、／彼女の美を得てからは、／赤子が慈母を得たかのよう。）」そしてその恋慕の情は、専らあなたの為に「私」は生まれた、とまでの執着を生む：「乃知造我者，／我生专为君。（そこで知る、私を創造した者は、／専らあなたの為に私を生んだのだと知る。）」¹⁹。

「恒山心影」は七言二句、16連構造の旧体詩であり、第13連からは「兮」を用いた楚辞体に変化している。本作は「美的頌歌」同様に美女に恋焦がれる心情を歌ったものである：「君之来兮何晚？／我眼欲穿兮我魂欲断！（君の来るのは何故こうも遅いのか？／私の瞳は穴を穿ち私の魂は断絶しようとする！）」²⁰。

太原『狂飆』月刊の創刊からほどなく、高長虹は太原を離れて北京に向かう。主宰を失った『狂飆』月刊は11月1日に発行した第2・3号合刊を以て停刊となり、高長虹を大いに失望させた。本誌に発表された「離魂曲」は一連四句、長短句、「兮」が多用され、『楚辞』の形式に倣ったのべ100連にも及ぶ長篇詩である。

まず冒頭において「私」は誰のため生きるのか、誰が自分を導いてくれるのか、と問う：「1 桂冠兮尘封，／晶泪兮成冰，／爱不我与兮，／吾将为谁而生？（月桂冠は塵にまみれ、／水晶の如き涙は氷となる、／愛は私に与えられず、／私は誰のために生きようというのか？）2 大海兮涛狂，／吾生兮如船，／谁为我把舵兮，／驶向日出之东方？（大海原に波は荒れ狂い、／我が人生は船の如し、／誰が私のために舵を取り、／日出づる東方に運航してくれるのか？）」²¹。

そして「私」には恋慕う「佳人」がおり：「3 我有佳人兮，／溺彼现实

之浊流。／我有佳人兮，／日随风波而浪游。（私に佳人あり、／現実の濁流に溺れる。／私に佳人あり、／日々世の移り変わりに従って漫遊する。）、「私」は彼女に自らの才能を捧げて求愛しようとする：「8 吾生有所为兮，／为彼佳人。／吾有美才兮，／将献之以求婚。（私の生にも意味がある、／かの佳人のため、という。／私に麗しき才あれば、／これを献上して求婚しよう。）」²²。

しかし佳人は「私」の才能にまるで関心を示さず、それを恨んだ「私」は魂を彼女に取りつかせ、危害を加えるよう命ずる：「9 脸漂亮兮眼昏，／桃李其貌兮，霜雪其心，／视我之珍宝兮，不值一晒—／我之珍宝兮，固炼自宇宙之精醇。（顔立ちは美しくとも眼は昏く、／風貌は若々しくとも心は老人のよう、／私の珍奇な宝を見ても、一笑にも値しない—／私の宝は、もとより宇宙の純粹なる精華より錬成されたものなのに。） 10 吾歌未终兮，／吾魂已飞；／吾将化为厉鬼兮，／凭彼身而作祟。（私の歌はまだ終わらないが、／我が魂は既に飛び立った；／私は悪霊と化し、／彼女に取り付いて祟りを為そう。）」²³。しかし「私」の魂は私の意向に逆らい、彼女に危害を加えようとはしない。

そこで「私」は魂を呼び戻し、彼女に「私」の夢想を伝えさせようとする：

「16 吾作招魂兮，／命彼归来，／吾欲托之以重任兮，／为我作玉宇之邮差。（私は魂を呼び戻し、／帰ってくるよう命ずる、／私の為に重責を託して、／天空の郵便配達人になってもらうように。）」²⁴。

「私」は日本、パリ、ベルリンを旅し、シェリー、バイロンといった詩人を弔い、ナポレオンやヴィルヘルム2世といった歴史的偉人たちに思いを馳せる（18連—21連）。そして革命を夢見る「私」はマルクスを批判し、戦闘を指揮することを願うがその力を失ったことを嘆き、佳人に魂を返してほしいと哀願する（22連—26連）：「23 吾欲鞭马克司之尸兮，／何为造科学之谰言？／俄罗斯二万万之赤子兮，／遂初生而逢殃。（私はマルクスの遺体に鞭打ちたい、／何故科学のデタラメを作り出したのか？／ロシア二億の赤子たちは、／生まれてすぐ禍に遭ってしまった。）」²⁵。

「私」は一向に自身の求愛に関心を示そうとしない佳人に対して恨み言を言い、行きどころを失った魂を憐れみ、無茶な命令を下した自身を責める（27連—34連）。魂に帰ってきて佳人の思いを伝えてほしいと願い、魂の導きで佳人と夢で出会う。「私」は佳人とともに理想郷であるアナーキズムの世界を旅し、故郷の人々を救おうとする（35連—48連）：「47 安那其之美备兮，／乃超人之所居。／吾在群彦之中兮，／忝滥竿而充数。（アナーキズムの完璧さこ

そ、／ 超人の居所。／私は群英の中に在りて、／忝（かたじけな）くも人数合わせて居させてもらおう。）」²⁶。

「私」は人々を救済しようと「狂飆の大いなる叫び」を発するが、人々には届かず却って非難を受けてしまう：「49 掇太阳而为光兮，／发狂飆之长啸，／众耳聳而目眩兮，／咒我为乱世之妖。（太陽を捧げて光と為し、／狂飆の大いなる叫びを発する、／人々の耳は遠く眼は昏み、／私を乱世のあやかしと呪う。）」²⁷。理解されない悲しみを佳人によって癒し、「私」は佳人の聡明さを称えて再び志を取り戻す。「私」と佳人は先駆者として人々を導き、人々は歓呼の声で私たちを迎えることを夢見る（49連—59連）。

「私」は佳人が自分のもとにやって来ることを願って彼女の賛歌を作り、気宇壮大、古の名曲を思わせる大作が完成する：「71 辞倾河海兮笔挟雷电，／四韵铿鏘兮五色斑斓，／壮兴云飞兮逸思雨来，／惟赖佳人兮赐我灵感。（言辞は大河大海を傾け筆は雷電を差しはさむ、／四韻は美しく響き彩り艶やか、／壮大なる興趣は雲のごとく飛び超越した思いは雨のごとく来る、／ただ佳人に頼るは私に靈感を賜らんことを。）」²⁸（60連—72連）。

「私」は魂に早く戻ってきて「宝剑」を受け取り、佳人の護衛となって有象無象から彼女を守れと命ずる（73連—78連）、また再び魂の帰還を促し、「天帝から授かった遺産」：「月の広寒宮」や「天の川の神水」、「孔雀の羽根」に「仙鶴のコート」や「虹の裳裾」といった宮殿や珍奇な宝物を佳人に与えて彼女を楽しませたいと願う（79連—84連）。

しかしいつまでも戻ってこない魂にしびれを切らせ、私は意気消沈しつつも、佳人と自身の魂を想い続ける。魂の帰還を待つて太原を出発し、日本・恒山・西湖など各地を放浪しようと夢想するが、遂に「私」の魂は失われてしまい（85連—99連）、絶望した「私」は佳人に反魂の香を焚くよう哀願する：「100 忽山岳之崩颓兮，／余倒身而在床。／如佳人其爱我兮，／请为我蕪返魂之香！（忽ち山々は崩れ落ち、／私はベッドの上に倒れ伏す。／佳人が私を愛しているなら、／どうか私の為に反魂の香を焚いてくれ!）」²⁹。

本作はまず、「私」の佳人への愛慕の情と、魂を奪われ続けながらも求愛に応えてくれない佳人への怒りや不満、執着、そして「私」の絶望を歌った悲恋の物語の歌として読むことが出来る。しかしこの100連にも及ぶ長編詩は、そうした単純な解釈に納まりきらない多彩な側面を併せ持っている。

はじめに屈原「離騷」との共通点について形式及び内容の両面から考察して

みよう；長短句の採用、そして「兮」の多用から作者が『楚辞』の形式を意識していたことは明らかである。さらに奇数句の末尾に「兮」が加わり、四文字目に助辞かそれに類する文字が入っている点は『楚辞』の中でもとりわけ「離騷」を模倣していると言える：

ex 「忽山岳之崩頽兮，／余倒身而在床。」（「離魂曲」第100連）

「帝高陽之苗裔兮，朕皇考曰伯庸。」（『楚辞』³⁰「離騷」冒頭）。

また、「離騷」における歌い手「正則」の；君主を補佐し世を救いたいと願うも世に容れられない不満、俗世を離れて天上世界に遊び女神たちに求愛するも受け入れられない悲哀、といった内容は、「離魂曲」における「私」の；人々を救おうと「狂瀾の叫び」を上げるも理解されない不満、佳人に求愛するも受け入れられない絶望、といった形で引き継がれている。

このように、高長虹が「離騷」を下敷きに「離魂曲」を執筆した可能性は非常に高い。従って「離魂曲」は単なる恋愛の歌というだけでなく、「離騷」同様国を救おうと願うも世に容れられぬ不満を訴えた歌、という読み方が可能になり、言行1996や郝雨2000はむしろこちらの解釈の立場に立っている³¹。

また、「離魂曲」には当時の作者の思想や関心を反映した箇所が多々存在しており、高長虹の思想状況を理解する格好の手掛かりを提供してくれる；

既に言及したように、政治思想においてはマルクス主義を明確に否定し（23連）、アナキズムへの傾倒（47連）を見出すことができる。また、自然科学への関心（45連）「45 我大如宇宙兮，／小如电子，／彼立我指爪之上兮，／我宿彼血轮之内。（私は大なること宇宙のごとく、／小さきこと電子のごとし、／彼女は私を爪の上に立たせ、／私は彼女を赤血球の内に宿らせる。）」³²、さらに、五四運動以降の思想革命を連想させる先駆者としての自覚（57連）「57

恍大梦之初觉兮，／众欣欣其再生，／吾与汝先驱而指路兮，／众踊跃而追奔。（突然大いなる夢より覚め、／人々はその再生を喜ぶ、／私とあなたは先駆者として道を指し示し、／人々は喜び勇んで後を追う。）」³³も読み取ることができる。

そして本作において繰り返し登場するのが日本・ドイツ・フランス・イタリアといった海外を旅する夢想であり、作者の未知の世界への憧れが表現されている（18・19・20・99連）；「18 吾将登富士之高巔兮，／吸东方之朝曦；／吾将泐爱琴之幽窈兮，／瞰海女之仙宫。（私は富士山の頂に登り、／東方の朝日を吸いこもう；／私は琴のひそやかな調べを愛し、／海の女たちの宮殿を見下

ろそう。)]³⁴。このように「離魂曲」には、当時の高長虹の政治思想や関心の在りか、そして未知の世界への憧れといった内容が豊富に盛り込まれていることが分かる。

ここで一度初期から太原時代の高長虹の創作と思想についてまとめておこう。

高長虹の執筆活動はホイットマンやシェリーと言った海外の詩人の翻訳から始まり、初期創作「紅葉」、「禱歌」、「懊惱」、「永久的青年」、「檻中之狼」といった詩歌に繋がる。この時期の作品は形式面では自由詩のスタイルを採用し、テーマとしては“旧家庭への抵抗”を中心に自然・夢・真理・自由といった西洋近代文学から影響を受けたものが多い。創作思想としては自然主義を信奉している。

活動の舞台を太原に移した高長虹は、山西の文学青年たちと“貧民芸術団”を結成し、太原『狂飆』月刊を舞台に“狂飆運動”を開始した。高は『狂飆』月刊誌上に「美的頌歌」、「恒山心影」、「離魂曲」といった旧体詩を発表する。これらの詩歌は基本的に「美女」、「君」、「佳人」への恋慕の情を歌ったものであるが、「離魂曲」のように『楚辞』「離騷」の形式を借りて世に容れられぬ不満を歌った側面を持つものも存在する。この時期の作品の主題について、言行1996³⁵は具体的な女性に対する恋慕では無く「抽象的な美の追求」であるとし、また郝雨2000は「国家や民族に対する愛情」であると考え³⁶、張清祥2003は「理想社会の追及」であったとする³⁷。一方廖久明2011は上記論点を認めつつも、石評梅個人への恋慕の情を歌ったものであったと考えた³⁸。この点について論者は、「美的頌歌」、「恒山心影」には実社会や国家民族に関する具体的記述が存在しない以上、石評梅に対する恋情が中心となるという廖久明2011の観点に同意するが、「離魂曲」には個人的な恋情だけでは無く、当時の高の社会への関心と新たな世界への憧れも描かれていると考える。

またこの時期の高長虹の思想については；マルクス主義の否定とアナーキズムへの傾倒、自然科学への関心、五四運動後の思想革命を担う「先駆者」としての自覚、といったものが読み取れる。

このように初期から太原時期にかけての高長虹の作品においては、【旧家庭からの脱出】から【新たな人間関係の中で生まれた“恋愛”の追及】、そして【社会変革の志向】といったテーマ及び思想の転換を見いだすことができる。

3. 北京“狂飆運動”時代

高長虹は1924年9月に太原から北京に活動拠点を移し、1926年4月に上海に

赴くまで北京で“狂飊運動”を展開した。この時期、高は連続して3つの雑誌：『狂飊』週刊、『莽原』週刊、『弦上』を主宰して自作を誌上に発表したほか、『京報副刊』にも多数作品を発表するなど旺盛な活動意欲を示している。本章では高が主宰した雑誌と誌上に発表した文章に注目し、その文芸創作と思想の変遷の跡をたどっていく。

3.1 北京『狂飊』週刊（1924年11月—1925年3月）

1924年9月28日、高長虹は太原を離れて北京に赴き、宣武門外椿樹胡同の孟県会館に居を定めた。10月2日、『晨报副鐫』234号に「雨之歌」を発表するが³⁹、本作は「我只愿乘着理想的飞艇，／腾上广漠无垠的天空，／就像五色斑斓的彩虹，／在如铁如墨的阴云之中，／争那一瞬的光荣！（私はただ願う、理想の飛行船に乗って、／廣大無辺の天空に登り、／五色織りなす虹のように、／鉄のような墨のような暗雲の中で、／一瞬の栄光を争うことを！）」、「我也许驾一叶残缺的扁舟，／装载着永存的无结果的苦痛，／驶入血飞尸横的生命之海洋，／与那为水所飘荡的落花，／同其哀惨的命运。（わたしはひょっとしたら不完全な小舟を駆り、／永遠の結果のない苦痛を載せて、／血肉飛び散り屍が横たわる生命の海原に入り込み、／水に翻弄される落花とともに、／悲惨な運命を同じくするのかもしれない。）」⁴⁰というように、北京という新天地への旅立ちの希望と不安を歌ったものとなっている。

北京での生活開始早々、高長虹は太原に残してきた“狂飊社”同人から『狂飊』月刊の停刊という知らせを受け取る、その時の失望と希望の入り混じった心境が「徘徊」及び「風——心」に以下のように反映されている：「我所接受的青春何在？／我所发下的宏愿徒然！／二十七年的辛勤的驰逐，／我只赢得了病痛，愤懑！（私が享受した青春はどこに？／私が発した大志は無駄となった！／二十七年の懸命の奔走で、／私は病と憤懣を勝ち得ただけだった！）」、「唉，何所取舍呵，我的寸心！／寸心中分开两条相背的路径：／一条指向着义务的生的苦斗，／一条要引我入独乐的死的安寝。（ああ、なんの選ぶところがあるうか、我が心よ！／心の中では相反する道のりが分岐している：／一つは義務である生の苦闘に向かっており、／一つは私を一人楽しい死の安眠に引き入れる。）」（以上「徘徊」⁴¹）、「我欲爱—／爱何人？／我欲杀—／杀我身！（私は愛したい—／誰を愛する？／私は殺したい—／わが身を殺したい！）」（「風——心」⁴²）。

こうした高の心境は、友人宛の書信である「致籍雨農」により具体的に記述

されている：「雨農!你看了我的「徘徊」和「風—心」,你可以知道我近来的心弦上在弹着什么调子了。悲哀几乎要融化了我,我的心中的火花,几乎要完全熄灭了。(雨農!君は私の「徘徊」と「風—心」を読んで、この頃の私の心の琴線の上ではどんなメロディが奏でられているかわかることだろう。悲哀はほぼ私と融合しようとしており、我が心中の火花は、ほぼ完全に消えようとしている。)」⁴³と当時の失望を告白しつつも、「我相信,没有一个能够使我屈服的,便是最残酷的死神-便到我被压在那死神的盾牌之下挣最后一息的时候,我相信,我一定能够保持住我的征服的态度,你听着,雨农-我又在要用鷹的调子唱起野蛮的狂飆之歌来了!(私は信じている、私を屈服させようものは一つとして存在せず、最も残酷な死神であっても—死神の盾に圧迫され最後のあがきをしているときであっても、私は信じている、私はきっと自分の征服者としての態度を保持していただけるだろうと、聞いてくれ、雨農—私はまた鷹のメロディーを用いて野蛮な狂飆の歌を歌い始めると!)」⁴⁴と“狂飆運動”の継続を宣言している。上記で言及した3篇はいずれも北京『狂飆』週刊第1期(1924年11月9日)に発表されたものであり、創刊の経緯は以下の通りとなる：

1924年10月、第2次奉直戦争中に馮玉祥が総統曹錕を監禁してクーデターを起こし、国民軍の成立を宣言する“北京政変”。かつて曹錕によって封鎖されていた『国風日報』⁴⁵がこの政変後に復活し、創設者景九梅⁴⁶も復職した。景と旧知であった高長虹は彼と相談の上『国風日報』副刊として『狂飆』週刊を創刊し、新たに“狂飆運動”の発信基地とした、本紙の編集者は“平民芸術団”、発行者は“国風日報社狂飆週刊部(北京宣外魏染胡同)”となっている。

以下北京『狂飆』週刊に発表された高の作品を見て行こう。

3.1.1 「狂飆之歌」2篇と「狂飆週刊宣言」

北京『狂飆』週刊には“狂飆”の名を冠した作品が3篇掲載されている、「狂飆之歌(序言)」(北京『狂飆』週刊第2期1924年11月16日)、「狂飆之歌(青年)」(北京『狂飆』週刊第3期1924年11月23日)、そして「『狂飆』週刊宣言」(北京『狂飆』週刊第14期1925年3月1日)である。

「狂飆之歌(序言)」は北京『狂飆』週刊第2期に発表された散文詩である、「宇宙の心臓から迸り出た一個の血球」は地上に降りて「新たな上帝」に変化し、額には光を放つ「狂飆」の文字を刻みこんで、人々に「泪已不为你所需要了,你们的奴隶的手中,将要握着我送来的得胜的武器。朋友们!找你们的生命去,从生命的舍弃中。」(涙はもう君たちの必要とするものではなく、

君たちの奴隷の手の中には、私が送った勝利のための武器が握られることだろう。友たちよ！君たちの生命を探せ、生命の放棄の中から。）」⁴⁷、「朋友们，幸福将要降临你们了，但你们接受他时，须先献上铁和血的礼物。丰富的生命，将要被不吝惜生命的人所收获。（友たちよ、幸福はもうすぐ君たちのもとに降臨する、だが君たちがそれを受け取るとき、先ずは鉄と血の供物を奉げなければならぬ。豊かな生命は、生命を惜しまない人によって収穫されることだろう。）」⁴⁸と武器を手に犠牲を厭わず闘争し、生命と幸福を勝ち取れ、呼び掛ける。

「狂飆之歌（青年）」は北京『狂飆』週刊第3期に発表された白話詩であり、1連4句、19連の構成となっている。

「斗室」（小部屋）の中で震え飢えに苦しむ青年は、嘗て他人の為に悲しみ、悪人を倒して弱者を助けた：「他曾以左手去杀该死的暴客，／右手去援救无助的苦人。（彼は嘗て左手で死すべき盗賊を殺し、／右手で助けの無い人々を救った。）」⁴⁹。だが大衆から敵と誤解されて彼は「斗室」の中に戻ってしまう：「从群众的围攻中他跑回斗室，／他本欲救他们，而反被他们所逐，（群衆の包囲の中から彼は小部屋に駆け戻る、／彼はもともと彼らを救いたかったが、逆に彼らに逐われてしまった。）」⁵⁰、一方大衆は侵略者に媚びへつらって自らの自由を放棄するが、見返りなど求めない彼は、破れた喉を張り上げ、折れた剣を磨きなおして敵に突っ込む：「他要重提起吼破的喉咙，／更喧嚷宣布未来的福音，／他已磨快了被挫的钝剑，／要更猛烈地杀上了敌阵。（彼は再び叫んで敗れた喉を持ち出し、／さらに騒がしく未来の福音を宣言する、／彼は既に挫かれたなまくらを磨き、／更に猛烈に敵陣に殺到した。）」⁵¹。だが大衆は目の前の安逸を貪って権力者に媚びを売り、自身を閉じ込める牢獄を自らの手で作ってしまう。だがそれでも「私」は「君たち」大衆に目覚めた手を伸ばして青年と肩を並べてともに戦場に赴くことを願う。

このように本作は、大衆を救おうと奮闘するも理解されず却って迫害を受ける青年の苦しみ、敵に媚を売り安逸をむさぼる大衆への苛立ち、それでも共に戦おうと呼びかける「私」の希望を歌っている。本作に度々登場する「斗室」（小部屋）は、魯迅『呐喊』「自序」の“**铁屋子**（鉄の部屋）”⁵²を連想させ、魯迅が上げた呐喊の叫びによって目覚めた高たち「狂飆社」同人が、戦い傷ついて「斗室」≡“**铁屋子**”に立ち戻るも、また再び叫びを上げて戦いに向かう姿を描いたと解釈できる。

高自身は、もともとこの「狂飆之歌」を100首余りの大作として構想しており、中国の『ツァラトゥストラはかく語り』となることを期待していたという⁵³が、実際にはこの2篇で中断しており、次に“狂飆”の名を持つ文章が登場したのは、北京『狂飆』停刊前、第14期においてであった。

『『狂飆』週刊宣言』は、1925年3月1日に『京報副刊』及び北京『狂飆』14期に発表された。

まず冒頭において「黒沉沉的暗夜，一切都睡熟了，死一般的，没有一点声音，一个动作，阖寂无聊的长夜呵。／这样的，几百年几百年的时期过去了，而晨光没有来，黑夜没有止息。／死一般的，一切的人们，都沉沉地睡着了。（真っ暗な闇夜、全てはぐっすり眠り、死んだように、全く声も無く、動きも無く、静寂にして無聊な長い夜。／こんな風に、数百年また数百年の時間が過ぎ去った、だが朝日はまだやってくる、闇夜が終わることが無い。／死んだように、全ての人々は、みな深く深く眠った。）⁵⁴と数百年にわたって続く「闇夜」の中、人々が深く眠り続ける様相が描かれ、続いて暗闇の中目覚めた人々が互いに立ち上がり、前途を照らそうと呼びかけあう：「-时候到了，期待已经够了。／-是呵，我们要起来了。我们呼唤着，使一些不于期待的人们也起来罢。／-若是晨光终于不来，那么，也起来罢。我们将点起灯来，照耀我们幽暗的前途。／-软弱是不行的，睡着希望是不行的。我们要作强者，打倒障碍或者被障碍打倒。我们并不惧怯，也不躲避。（-時が来た、期待することはもう十分だ。／-そうだ、我らは立ち上がる。我らは呼びかける、期待に不安を持つ人々も立ち上がらせよう。／-もしも朝日がついに来なかったとしても、それでも立ち上がる。我らは明かりを点け、我らのほの暗い前途を照らそう。／-軟弱はいけない、眠りながら希望を持つのもいけない。我らは強者たらねばならぬ、障害を打倒するか障害に打倒されるか。我らは決しておびえず、逃げ隠れもしない。）」そしてこれら小さな呼びかけが「ひとすじの泉が大河の源流となり、ひとひらの木の葉の揺れが暴風の兆しとなるように」願って本誌を『狂飆』週刊と名付けたのだ、と誌名の由来を説明する。

これら“狂飆”の名を持つ三篇は、いずれも人々に目覚めて立ち上がり、現状との闘争を呼び掛ける内容となっており、上述の“鉄屋子（鉄の部屋）”から目覚めた人々のその後の闘争を歌ったものとなっている。そうした意味において、北京“狂飆運動”の主題は五四運動後の思想革命の一翼を担うことであったと考えられる。

3. 1. 2 「幻想与做梦」

「幻想与做梦」は、北京『狂飜』週刊誌上に第1期から第13期にかけて連載された連作散文詩である⁵⁵。のべ16篇、題名の通り高長虹の幻想と夢を綴った16篇の散文詩から構成されており、それぞれ小題がついている。

本作に統一されたテーマと言うべきものは無く、【高自身の感興】（「1. 從地獄到天堂」、「8. 我的死的幾種推測」、「9. 生命在什么地方」、「12. 我和鬼的問答」）や【恋愛・女性問題】（「3. 親愛的」、「4. 我是很幸福的」、「5. 美人 and 英雄」、「6. 得到她的消息之后」、「10. 婦女的三部曲」、「11. 一个没要紧的問題」、「13. 一封長信」、「14. 安慰」、「15. 迷離」）、【社会風刺】（「2. 兩種武器」、「7. 母鷄的壯史」、「16. 噩夢」）といった内容が夢幻の境地を思わせる筆致で描かれている：

高長虹の折々の感興を描いた作品では、「1. 從地獄到天堂」のように周囲の人々との衝突から逃れて自由に天空を舞う自身を夢想したもの、「8. 我的死的幾種推測」のように幾種類もの自身の死の様相を妄想したもの、「9. 生命在什么地方」のように生命を手に入れようとして果たせず、人類全てから拒絶された孤独感を歌ったものなど、高の時に高揚し時に沈む情緒が描かれる。

恋愛を題材とした作品では、「3. 親愛的」、「4. 我是很幸福的」、のように、当時想いを寄せていた石評梅との恋の成就を夢想したもの：「**亲爱的！让宇宙毁灭了吧，我们所需要的只有这不灭的爱情！让地球上所有的空间都被强者去占据了，我们的领土只有这超于空间的神秘世界。**（親愛なる者よ！宇宙を滅亡させよう、我らが必要としているのはただこの不滅の愛情のみ！地球上のあらゆる空間は強き者によって占拠された、我らの領土はただこの空間を超えた神秘の世界のみ。）」⁵⁶、また「6. 得到她的消息之后」、「13. 一封長信」のように思うに任せぬ片思いの苦しみを綴ったものが存在する。

女性問題を主題とした作品では、「明星のように」美しい女性が若年・中年・死後にわたって婚姻制度に振り回される生涯を描いた「10. 婦女的三部曲」、子供に慰めを求める母親の悲哀を描いた「14. 安慰」など、封建制度の下、自立を許されず虐げられる女性たちの姿が描かれる。

そして社会風刺を趣旨とする作品においては、「7. 母鷄的壯史」のように、近代中国の女性解放の歩みを「母鷄」が始めた人類に対する革命に仮託して描いたものや、「16. 噩夢」のように、夢の中で「未来の黄金時代に飛び込んだ」と思いきや、そこは「幽鬼どもが仮装」した「超人」のもと、「人類が皆奴隸

となり、食べ物になり、玩具になった」悪夢のような世界であり、「私は夢の中で、目覚めている時よりも、さらに真実の世界を目にした。／全てが悪で、全てが醜く、全てが虚偽だった。」⁵⁷と夢の中でも繰り返される現実世界の醜悪さを描いたものが存在し、高の鋭い批判精神を読み取ることができる。

3. 1. 3 「人类的脊背」

北京『狂飆』週刊6期には、「人类的脊背」という六幕構成の戯曲が発表されている。本作は高長虹初の戯曲作品であり、その梗概は；夫不在の家を独り守っていた許大嫂は通りかかった「見知らぬ男」に誘惑されて彼についていく。一方家を出て兵士となった夫の許老大は酒と博打に溺れていたが、ある日居酒屋で呑まざれているとき「見知らぬ男」と許大嫂がやってきて仲睦まじげに酒を飲むのを目にし、自分の妻が他の男のもとに走ったと気づく。許老大は宿で彼女を殺し、「見知らぬ男」も殺したあと自ら命を絶つ、というものである。本作に対して、高自身は「委实太理想了，也许是太顽皮了，总之是做得不好。我一点描画人类的本领都没有，所以是有时真佩服人类的自画自赞呢！（实际あまりに理想主義的で、あまりにやんちゃかもしれない、全体的に言ってよい出来ではない。私は人類の才覚など存在しないことを描き、そのため時に人類の自画自賛に敬服してしまうのだ！）」⁵⁸（「走到出版界・寄到八道湾」1927年1月13日）と低く評価するが、後年上海で展開された“狂飆運動”の後期において、高長虹が重点を置いた演劇運動の萌芽を本作に見出すことができる。

3. 1. 4 「攻城坎?攻心坎?」

「攻城坎?攻心坎?」（1925年3月1日 北京『狂飆』週刊第14期）は、高が北京『狂飆』週刊に発表した最後の作品となる散文詩である。

僅か数名の無名の兵卒である「我々」は人類の城ではなくその根底にある人類の心を攻めようとする、しかし人類の心を攻めるつもりが誤って人類の城を攻めるという失敗を犯してしまう。計画を改め、「开始攻他们的城，而去准备攻他们恐慌的心（初めは奴らの城を攻め、それから彼らの恐慌をきたした心を攻め）」ようと考えていた時、「新たな仲間」がやってきて勇気を回復し、「继续去攻那未跳的心（引き続きあの未だ跳ね動かない心を攻め続ける）」。しかし「然而，我们终以为光攻心不成的，所以，我们一面还在准备如何去攻城计划（だが我々は遂に光明を以て心を攻めることには成功しなかった、だから、我々は一方でどのように城を攻めるか計画を用意する）」⁵⁹といった「我々」の戦いの苦難を描く作品であり、当時の“狂飆運動”の状況を連想させる内容と

なっている。実際、24年11月に高長虹の二弟高歌が北京にやってきて“狂飆運動”に加わり、また同年12月に『国風日報』の校正担当閻宗臨が仲間に加わるなど、“狂飆社”同人はその数を増やしつつあった、しかし“狂飆運動”に注目したのは郁達夫、魯迅といった少数の作家に留まり、また北京『狂飆』週刊の売り上げは高の期待通りというわけにはいかなかった。

3. 1. 5 北京『狂飆』週刊の停刊

1925年3月22日、北京『狂飆』週刊が第17期を以て停刊となる、停刊の原因について、後年高長虹は以下のように言及している：「这时，狂飆社内部发生问题。这时，狂飆的销路逐期递降。这时，办日报的老朋友也走了，印刷方面也发生问题。终于，《狂飆》周刊到十七期受了报馆的压迫便停刊了。（この時、狂飆社内部に問題が発生した。この時、『狂飆』の売り上げは期を追うごとに低下していた。この時、日報をやっていた友人も出て行ってしまい、印刷方面にも問題が発生した。終に、『狂飆』週刊は17期になって新聞社の圧迫を受けて停刊となってしまった。）」（『走到出版界・1925，北京出版界形勢指掌図』）⁶⁰。このように、売り上げの低迷、人手不足、印刷トラブルといった諸要因によって北京『狂飆』週刊は創刊後わずか数カ月で停刊となってしまふ。

3. 1. 6 「創傷」と「土儀」

ここでは、北京『狂飆』週刊停刊前から次節で論ずる『莽原』創刊後にかけて発表された散文詩「創傷」と連作散文「土儀」について言及しておく。両者はいずれも1925年2月から4月にかけて『京報』副刊に発表されたものであり、12篇それぞれに小題が付けられている。

「創傷」は寓話的な色彩の濃い連作散文詩であるが、概ね【高自身の苦闘と心象】（「一. 沈没」、「三. 我願入地獄」、「四. 希望之一」、「六. 幻滅」、「七. 精神与薔薇」、「八. 指骨」、「九. 压油子」、「十一. 永久的真理」、「十二. 手的預言」）及び【社会批判】（「二. 血的帝国」、「五. 街上」、「十. 市場」）といった主題に分類することができる。

「一. 沈没」では「新たな苦痛」や「創造」を求める「生命」の叫びに応じて上昇を始めた「私」が、岩に激突して翼を折り、下降して「最下層の更に下」に横たわり、周囲の嘲笑と侮辱を受けて怒りの炎を燃やす：「我将无所需要，我将仇视人类，我将以愤怒为惟一之食物，我惟将以愤怒充实我之空虚（私は何も必要とせず、人類を敵視し、怒りを以て唯一の食物とし、憤怒を以て空虚を埋めようとする）」⁶¹。そして「三. 我願入地獄」において「私」は地獄に墮ち

て「真実の苦痛」を享受することを渴望し、自身を魔王になぞらえる。しかし「四. 希望之一」で「私」は、「大きな山」のようなより強い試練を受けて、自らを復活させることを願う。

このように高自身の北京『狂飆』週刊創刊から停刊前後までの苦闘と周囲の理解を得られない怒り、そしてそこからの「復活」を志向する姿を読み取ることが出来る。

一方、精神と薔薇の対話を描いた「七. 精神与薔薇」、指の骨のダンスという不思議な現象を描く「八. 指骨」、時折飛んできては“油を搾れ”と叫ぶ奇怪な鳥の故事を描く「九. 圧油子」、光明と暗黒、自己と他者が混然となった境地を描く「十一. 永久的真理」など、解釈に苦しむ難解な作品も数多く存在する。しかし、これら寓話的色彩が濃厚な作品においても、「十二. 手的予言」のように：「当强的手出现的时候，心便会用它的手说出它不能用话说出来的更真实的话来（強靱な手が現れた時、心はきつと手を用いて言葉では言えない更なる真実の言葉を話すだろう）」⁶²と高長虹の苦悩と未来への希望を垣間見ることが出来る。

そして「二. 血的帝国」や「五. 街上」、「十. 市場」の三作においては、高の強烈な社会批判の精神が反映される：

「二. 血的帝国」では、「愛の真理は、靈魂から流れ出た血の贈答」であり、「愛する人の血を吸いつく」しながら生きていかざるを得ない人間の宿命を呪い、「五. 街上」では、「紫に腫れあがった腐肉」や「淫猥な女性」、「死んだばかりの英雄」といった異形の者たちが徘徊する人間社会の踏みつけあう醜い現実が描かれ、「十. 市場」においては女性の遺体の上に作られた市場（妓楼を指すか）の醜悪な有様を描き、性の搾取の問題を提起している：「我在空旷的世界招呼伴侣而无所应的时候，我不复能够叹气了，因为我已经知道了我们的男子到了什么地方和我们的女子在做着什么（私は空虚な世界に在って伴侶に呼びかけ何の返事も無い時、ため息をつくこともできない、何故なら私は既に知っているから、我らの男子がどこに行つて我らの女子相手に何をしているかを）」⁶³。

このように、本作に先行する「幻想与做梦」に比べて恋愛問題をテーマとしたものが姿を消し、社会批判の度合いが強くなっていることが分かる。

「創傷」とほぼ同時進行的に執筆された「土儀」（「地元土産」）は、高の故郷や家族について語った連作散文である；「一. 一個失勢的女英雄」では、か

つて“女將軍”と呼ばれた郷里の威勢の良い女性が物乞いに身を落とすまでを描き、「二. 鬼的侵入」では、親戚の女性が幽鬼となって出迎えに来る迷信に満ちた夢を語り、「三. 我家的門樓」では、いつまでも取り壊されない実家の屋根付き門の由来を語っている。

「四. 孩子的智慧」では幼い息子高曙の可愛らしい言動を取り上げ、二弟高歌への書信である「五. 一封未寄的信」では“狂飊運動”に関する自身の思いを以下のように述べており：「狂飊使我痛苦，我最爱的狂飊赐我以最终的创伤。破坏啊！让我们第一板斧，先砍翻我们自己的孩子！（狂飊は私を苦しめる、我が最愛の狂飊は私に最も重い傷痕を与えてくれた。破壊だ！我らの最初の斧で、我ら自身の子供を切り倒せ！）」⁶⁴、「狂飊運動”における挫折が「創傷」を執筆させたことを窺わせる。

「六. 孩子们的的世界」では、子供たちの独自の世界が大人の法によって捻じ曲げられる姿を描き、「七. 悲劇第三幕」では三番目の弟高遠征の婚姻問題を論じ、「八. 正院的掌故」では昔実家の正院に住んでいた老人の思い出を語り、「九. 架窩の問題」では、実家に戻るときに駕籠を使うことへの葛藤を述べる。

「十. 改良」では、故郷の進歩的知識人C爺の寂寞を埋めるため、小学校の改良事業に協力した時のことを語り、「十一. 厨子的運氣」では実家の料理人C大爺の不遇な生涯を綴る、そして「十二. 伯父的教訓及其他」では伯父の古めかしい教訓とそれに対する「私」の反発が綴られている。

これら高の故郷や家族を題材とした散文は、1924年の年末に帰郷した際の出来事が題材となっている、些末な日常に潜む迷信や理不尽に対する高の鋭い批判的な眼差しは、彼が2章で言及した【旧家庭との格闘】の段階よりもより客観的な視点で家庭というものを見ていることが分かる。

以上北京『狂飊』週刊時期の高長虹の作品について概観してきた、この時期の作品の特徴としては：まず“狂飊”の名を持つ三篇に代表される、人々に目覚めて立ち上がり、現状との闘争を呼び掛ける姿勢（「狂飊之歌（序言）」、「狂飊之歌（青年）」、「『狂飊』週刊宣言」）を挙げることができる、そしてその闘争を呼び掛ける声は理解されず拒絶され、時に絶望を露わにすることはあっても（「幻想与做梦」：「8. 我的死的幾種推測」、「9. 生命在什么地方」など）、苦難を乗り越え再び戦いに立ち上がる強かさ（「創傷」：「四. 希望之一」、「十二. 手的预言」）という点も見落とすことはできない。

また、当時想いを寄せていた石評梅との恋を歌ったもの（「幻想与做梦」：

「3. 親愛的」、「4. 我是很幸福的」、「6. 得到她的消息之后」)や、次第にその激しさを増す醜悪な現実に対する批判(「幻想与做梦」:「2. 兩種武器」、「7. 母鷄的壯史」、「16. 噩夢」、「創傷」:「二. 血的帝国」、「五. 街上」、「十. 市場」)もこの時期の特徴と言えよう。

このように北京『狂飆』週刊期の高長虹の作品には、【狂飆運動を通じた啓蒙運動】と【現実社会への批判】といった新たなテーマが登場するほか、【石評梅への恋慕】といったテーマも引き続き存在している。

まとめ

以上高長虹の初期習作期から北京『狂飆』週刊期にかけての作品及び思想について概観してきた、ここで一度まとめておきたい。

高長虹の文学活動はまずホイットマン・シェリーといった海外の詩人の翻訳から始まり、「紅葉」、「懊惱」、「檻中之狼」といった初期作品においては、【旧家庭からの脱出】と【自然、夢、真理、自由への憧れ】といったテーマが多くを占めるようになる。太原に拠点を移して“狂飆運動”を開始した時期の:「美的頌歌」、「離魂曲」と言った作品では、【新たな人間関係の中で生まれた“恋愛”の追及】、そして【社会変革の志向】といった主題への転換が見出される。

北京に拠点を移して北京『狂飆』週刊を発行した期間の高長虹の作品には、【“狂飆運動”を通じた啓蒙運動】(「狂飆之歌」と【現実社会への批判】(「幻想与做梦」:「2. 兩種武器」、「7. 母鷄的壯史」、「16. 噩夢」、「創傷」:「二. 血的帝国」、「五. 街上」、「十. 市場」)といった新たなテーマが加わった上、【石評梅への恋慕】(「幻想与做梦」:「3. 親愛的」、「4. 我是很幸福的」、「6. 得到她的消息之后」)といったテーマも引き続き存在している。

この後、高長虹は魯迅の知遇を得て『莽原』週刊を立ち上げ、思想革命の一翼を担って、現実社会との熾烈な闘争を開始する。『莽原』週刊期、そして続く『弦上』週刊期における高長虹の創作及び思想は如何なるものであったか、本稿で論じていきたいのだが、紙幅をあまりに費やしすぎた、下篇において引き続き論じていきたい。

下篇目次

3.2 魯迅との出会いと『莽原』週刊

3.3 『弦上』週刊

おわりに

注

- 1 本稿において使用する中国語の簡体字・繁体字は、引用部分を除いて出来る限り日本語の新字体で表記するものとする。
- 2 『高長虹年譜』（廖久明 人民出版社 2011年以下『年譜』）、「高長虹年表」（廖久明『高長虹全集』2011年所収）などを参考にした。以後本稿における高長虹の生涯に関する記述は基本的に上述の資料を踏まえたものである。
- 3 『島大言語文化』49号2020年10月
- 4 廖2011によれば「狂飜社論」（韓起 『流露月刊』 2巻1期1931年5月）、「魯迅与狂飜社」（林辰 『文芸春秋』 6巻4期 1948年4月）の2篇のみであるという。
- 5 令和元年度（2019年）科学研究費補助金（課題番号19K00371）「狂飜社と山葉蛋派の比較研究」
- 6 『高長虹全集』2011年 中央編訳出版社 3巻p11
- 7 同上p12
- 8 『晨报副鐫』は1920年に創刊され、1921年10月21日に正式に『晨报副刊』に名称が定まる、孫伏園が主任編集を務めた。
- 9 初出は『小説月報』1922年第13巻第10期。
- 10 『全集』 3巻p15
- 11 同上p17
- 12 同上p18
- 13 「土儀」『全集』 1巻p119
- 14 『全集』 3巻p19
- 15 「高長虹詩文散論」屈毓秀『晋陽学刊』1986年第3期 6月30日、「高長虹創作走向略述」『歴史的沈重』所収p1-34 言行 百花文芸出版社 1996年7月
- 16 1921年8月、太原において王振翼、賀昌、張稼夫らによって設立された進歩的出版物を販売する書店。
- 17 『全集』 3巻p20
- 18 太原『狂飜』月刊は既に失われており、本文の記述は「魯迅与狂飜社」『新文学史料』1981年第3期に拠った。
- 19 『全集』 1巻p6-p9
- 20 同上p10-p12
- 21 同上p13
- 22 同上p14
- 23 同上p15
- 24 同上p16
- 25 同上p18
- 26 同上p22
- 27 同上p23
- 28 同上p27
- 29 同上p33
- 30 『楚辞集注』宋朱熹選 上海古籍出版社 2015年
- 31 「高長虹創作走向略述」『歴史的沈重』所収p1-34 言行 百花文芸出版社 1996年7月、「高長虹詩論」郝雨『中国現代文学叢刊』2000年4号
- 32 『全集』 1巻p22
- 33 同上p24

- 34 同上p16
- 35 「高長虹創作走向略述」『歴史的沈重』所収p1-34 言行 百花文芸出版社 1996年7月
- 36 「高長虹詩論」郝雨『中国現代文学叢刊』2000年4号
- 37 「精神創傷の置換与昇華」—論高長虹詩歌創作的主题—張清祥『南陽師範学院学报(社会科学版)』2003年2卷1期
- 38 「“性的煩悶”对高長虹創作的影響」廖久明『現代中国文化和文学』2011年1期
- 39 のち「雨的哀歌」という題名で北京『狂飆』週刊第2期(11月16日)にも発表された。
- 40 『全集』3卷p22
- 41 『全集』1卷p129
- 42 同上p132
- 43 『全集』3卷p25
- 44 同上
- 45 1911年3月北京において創刊、反清、反袁世凱、反軍閥を趣旨とする。
- 46 景梅九(1882-1961)中国の無政府主義者、山西省の人、日本留学を経て中國同盟会に参加し、革命運動に従事する。帰国後は『国風日報』を創刊し、ジャーナリストとして活躍した。
- 47 『全集』3卷p28
- 48 同上p29
- 49 同上p30
- 50 同上p30
- 51 同上p32
- 52 『魯迅全集』魯迅 人民文学出版社 2005年 p441
- 53 「致籍雨農」『全集』3卷p25
- 54 『全集』3卷p41
- 55 掲載号及び日時は以下の通り:「一」、「二」は北京『狂飆』週刊第一期(1924年11月9日)掲載。「三」から「六」までは北京『狂飆』週刊第二期(1924年11月16日)掲載。「七」は北京『狂飆』週刊第三期(1924年11月23日)掲載。「八」—「十」は北京『狂飆』週刊第4期(1924年11月30日)掲載。「十一」「十二」は北京『狂飆』週刊第5期(1924年12月7日)掲載。「十三」は北京『狂飆』週刊第9期(1925年1月11日)掲載。「十四」は北京『狂飆』週刊第10期(1925年1月18日)掲載。「十五」は北京『狂飆』週刊第12期(1925年2月15日)掲載。「十五」は北京『狂飆』週刊第13期(1925年2月22日)掲載。
- 56 『全集』1卷p75
- 57 同上p88
- 58 『全集』2卷p287
- 59 『全集』3卷p43
- 60 『全集』2卷p197
- 61 『全集』1卷p100
- 62 同上p112
- 63 同上p110
- 64 同上p118

* 本稿は、令和元年度(2019年)科学研究費補助金(課題番号19K00371)による研究成果の一部である。